

エコミュージアムの発想に基づく「学校・家庭・地域の連携」 — 福富町立久芳小学校における水辺を生かした生活科学習を事例として —

朝倉 淳・山崎博史・竹下俊治・浅野敏久*・古賀信吉・林 孝
(2003年12月3日受理)

Cooperation of School, Home and Community Based on the Idea of Eco Museum: In the Case of the Lessons of Life Environment Studies at Kuba Elementary School

Atsushi Asakura, Hirofumi Yamasaki, Shunji Takeshita, Toshihisa Asano, Nobuyoshi Koga and Takashi Hayashi

Abstract. The actual situation of education makes the importance of cooperation of school, home and community great. The aim of this paper is to show the schema and strategy of cooperation of them. Through the lessons of Life Environment Studies we found that the idea of Eco Museum help us make cooperative relationship among them. According to the idea of Eco Museum, we can regard our region as a classroom for learning. We can use many persons, places, natures and social institutions as effective teaching materials.

1 はじめに

「学校・家庭・地域の連携」は、多くの教育問題の考察に用いられる枠組みである。今日、学校教育のあり方や役割が揺れる中で、その重要性はますます高まっていると言えよう。しかし、実際には、言葉だけで具体が伴わなかったり、形式的な連携にとどまっていたりすることも多い。この理念が現実の教育問題に有意に機能するには、どのようにすればよいであろうか。

本研究は、広島大学が進める地域貢献研究の一つ(研究課題「学校との連携を考慮したエコミュージアムづくり」)である。これは、後谷エコミュージアム(広島県賀茂郡福富町後谷地区)をモデルケースとして、地域と学校が連携し、地域の学習材を活用した体験学習を構成し、その過程を通して、「学校・家庭・地域の連携」について具体的に考察するものである。本小論では、この研究の一環として実施した生活科学習を事例として、「学校・家庭・地域の連携」についての具体的な枠組みと方法を示すことを目的とする。

以下、次の順序で考察する。まず、エコミュージアムの発想と生活科の関連についての整理を行い、エコミュージアムの発想を活かした生活科学習について考察する。次に、本研究グループが実践へ参画した、福富町立久芳小学校における水辺を活かした生活科学習について、連携の経緯と学習状況を示す。最後に、「学校・家庭・地域の連携」のあり方について考察し、具体的な枠組みと方法を示す。

2 エコミュージアムの発想と生活科学習

2.1 エコミュージアムの発想と研究動向

エコミュージアムは、1960年代、フランスのアンリ・リヴィエールによって提唱された新しい博物館の概念である。当時のフランスの政治状況を反映し、既存の価値体系に挑戦し、見直していくという思想をもっていたと言われる。

この概念が日本に紹介されたのは1970年代であるが、広く普及するようになったのは1980年

*広島大学総合科学部

代末から90年代以降である。ただし、日本では、発祥当時のポストモダンな思想をあまりもたないスタイルで、この概念は受け入れられていった。

1995年には全国的な研究・交流組織である日本エコミュージアム研究会(JECOMS)が設立された。エコミュージアムは単に研究の対象というのではなく、地域づくり関連事業としても取り入れられるようになり、国の関係では、文化庁の天然記念物整備活用事業(天然記念物エコミュージアム事業:1995年度から)や元環境庁のエコ・ミュージアム整備事業(1995年度から)、農水省の田園空間博物館整備事業(1998年度から)などが生まれた。地方自治体では滋賀県が全県をエコミュージアムとする構想を打ちだしたほか、市町村レベルでもエコミュージアムをキーワードとしたまちづくりの考え方を打ちだすところが現れている。

エコミュージアムは、地域をひとつの博物館とみなし、その中で人間と環境とのかかわりについて学び、考えていく場と捉えられている。地域の中にあるモノ・人・コト、場所の記憶などを地域の資源として再評価・再価値化し、そこにあるがままの姿で利用していこうとする試みでもある。JECOMSの定義では「エコミュージアムは環境と人間との関わりを探る博物館システムである。それは、ある一定の地域において、住民の参加により、研究・保存・展示を行う常設の組織であり、地域社会の持続的な発展に寄与するものである」(JECOMS「エコミュージアム憲章2001」)と定められている。各地での実践活動において、あるいは研究者において、この概念についての説明がなされているが、最近では「博物館という名をもつものの、形ある野外博物館のようなものではなくて、活動に与えられた概念だととらえるとわかりやすい」とされている^①。エコミュージアムは、ある種の理念を実現しようとする運動だと言える。

エコミュージアムの取り組みに際しては、立場や地域により、さまざまな解釈がなされてきた。博物館学、自然保護運動、地域づくり、生涯学習などの視点から注目され、中でも地域づくりに関する研究や実践の現場から高い関心が寄せられている。例えば、農村地域のエコミュージアム活動は村おこし的であり、住民の地域に対する愛着を深め、主体的な参加を促すことを意図し、地域資源の活用を前提とした地域づくり活動である。し

たがって、観光など経済的な効果を期待する面がみられる。一方、都市部では、身近な自然に親しむとか、地域をよく知るといった生涯学習的な側面が強調され、経済効果よりもライフスタイルを見直したり、地域のアイデンティティを醸成したりすることに力点がおかれている。

このような状況を受けて、エコミュージアムに関する研究もさまざまな観点から行われているが、実際には、一般的概説書や事例報告・実践報告的なものが多い^②。JECOMSの機関誌も刊行されているが、事業化など実践面での普及の度合いと比べると、研究という意味では深められていない状況にある。

2.2 生活科における「学校・家庭・地域の連携」と研究動向

近年、教育に関するさまざまな場面で「学校・家庭・地域の連携」が強調される。その背景について、有馬毅一郎は、生涯学習社会への移行、学校週五日制への移行、学校教育・家庭教育・社会教育の関連の希薄化を指摘する^③。このような状況に加えて、具体的な活動や体験を重視する生活科の創設によって、より強く連携が求められるようになっていく。最近では、小・中学校で2002年度から完全実施となった「総合的な学習の時間」や道徳教育の問題とも関連して考察されている^④。

小学校学習指導要領(1998年版)に示された生活科の内容には、(2)家庭と生活、(3)地域と生活、(4)公共物や公共施設の利用、(5)季節の変化と生活など、直接、家庭や地域を対象とするものがあるほか、すべての内容において家庭や地域との内容的な関連がある。また、生活科では「具体的な活動や体験」を目標であり内容であり方法でもあるとする^⑤が、それが行われる場合は学校であり家庭であり身近な地域である。このように、生活科はもともと家庭や地域と関係の深い教科である。生活科における「学校・家庭・地域の連携」は、必要不可欠なことがらなのである。

生活科における「学校・家庭・地域の連携」は、大きく次の4点から言及されている。

- ① 生活化の観点^⑥
- ② 人、地域の組織・団体の活用の観点^⑦
- ③ 学習材や学習環境としての観点^⑧
- ④ 信頼関係構築の観点^⑨

これらの観点は、いずれも、生活科あるいは「総合的な学習の時間」における連携を考察する際に重要なものである。同時に、これらは、広く教育全般にかかわってくる観点でもあろう。

2.3 エコミュージアムの発想を活かした生活科学習

エコミュージアムの発想は、生活科とどのような関連があるのだろうか。表1は、地域に対する見方や目標概念、学びの対象・内容などにおいて並置してみたものである。

表1から明らかなように、両者には共通する点が多い。特に、学びの対象・内容については、広く重なっていると捉える。前項の③であげた学習材や学習環境という観点到結びつく部分である。

エコミュージアムの発想を活かすならば、地域にあるモノ・人・コトは、ただそこにあるのではなく、生活科の学習材や学習環境としても積極的に再評価され、活用されると捉えることができる。また、それは、教室に持ち込まれるのではなく、そのままその場所にあることによって、学びの場(サテライト)として機能する。教室が移動、あるいは拡大したと捉えることもできるが、地域全体

を一つの教室(学びの場)と捉えることもできる。

エコミュージアムの発想によって、生活科学習における地域の学習材・学習環境に対する見方が深まるほか、地域の人・団体・組織の役割や専門性のより有効な活用が期待できる。

3 福富町立久芳小学校における連携の実際

3.1 久芳小学校における連携の概要

福富町立久芳小学校(東佐都子校長、広島県賀茂郡福富町久芳)は、賀茂台地の中央に位置する小規模校(学級数7、児童数94名、2003年5月1日現在)である。

本研究における久芳小学校との連携は、地域との連携体制を整えた後、2003年に入ってから実施している。連携の経緯の概要は次のとおりである。

① 研究の説明と連携の提案[2月24日(月)]

本研究グループから学校の代表者等に対して、研究目的、研究計画などの概要説明と連携の提案を行った。また、同校の生活科・「総合的な学習の時間」の実施状況、子どもの実態、家庭や地域との連携の状況及び連携の可能性について、話し

表1 エコミュージアムの発想と生活科

	エコミュージアムの発想	生活科
地域に対する見方	地域を一つの博物館と見なす。	学校・家庭・身近な地域を学習の場と捉える。
目標概念	自然保護、地域づくりや地域おこし(経済効果を伴う)という視点、地域を知り自然に親しむなど生涯学習の視点から、取り組まれる。	自立(学習上の自立・生活上の自立・精神的な自立)への基礎を養うことが、教科目標とされている。
主な学びの対象・内容	地域のモノ・人・コト、場所の記憶など人間と環境とのかかわり	(内容構成のための基本的視点) 自分と人や社会とのかかわり 自分と自然とのかかわり 自分自身
主な活動	地域資源を、再評価、再価値化して、あるがままの姿で利用する。 地域資源を研究し、その場所で保存、展示する。展示場所をサテライト(溜池サテライト、史跡サテライト、里山サテライト等)と呼ぶ。	校内(教室、特別教室、グラウンド、学級園等)や地域(町並み、店、公園、里山、水辺等)で、具体的な活動や体験(見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして直接働きかけることや、言葉、絵、動作、劇化などによって表現すること)をする。
活動や学習の主体	地域住民の主體的な参加を意図し、国や地方自治体などが事業化している。 郷土研究者、職業研究者、地域の達人などや地域の住民が学芸員としての役割を持つとともに、サテライトを支える。	学校教育における教科として、教師によって構成された授業において、子どもが学習する。 地域のモノ・人・コトを、学校、教室に持ち込んだり、地域に直接出かけたりして、学習する。地域の人材は、ゲストティーチャーとしても活用される。

表2 学校に提示した単元プラン例(一部)
第2学年 生活科 「久芳っ子,わくわく里山探検に行こう」 第1次 わくわく里山探検にむけて (4月下旬~5月上旬 11h) の場合

学習活動	子どもの意識と気付き	④内容	教師のかかわりと意図	場	地域の人	地域の自然・社会
<p>「久芳っ子の水辺」との出会い(1h)</p> <p>1 VTR「こんなところにこんな生き物が見る。」</p> <p>2 校庭,学校のまわり,地域で見つけたおもしろい動植物や建造物などを紹介し合う。</p> <p>3 里山探検の目的地とルートを探検マップで確かめる。</p>	<p>おもしろいな。</p> <p>こんな生き物がいるのか。</p> <p>自分も知ってるぞ。</p> <p>それは,知らなかった。</p> <p>おもしろそうだな。</p> <p>行ってみたいな。</p> <p>どこを通っていくのかな。</p>	<p>(3) ○○○○ムシ</p> <p>(4) ○○○○ムシ</p> <p>(5) マップ</p> <p>(7) 目的地 ルート</p>	<p>1 VTR「久芳っ子の水辺」を提示し,地域の自然のおもしろさに気付かせる。</p> <p>2 これまでの地域における経験を想起させるとともに,いろいろな驚きと疑問に出合わせる。</p> <p>3 楽しい活動マップを提示し目的地とルートの説明をしてイメージを持たせる。</p>	教室	○○○○ (VTRに)	(VTRで) ○○○ (話で) ○○○ ○○○ ○○○
<p>里山探検計画づくり(3h)</p> <p>1 持参物や服装について,話し合う。</p> <p>2 探検グループを作る。</p> <p>3 グループ内の役割分担や安全のためのルールを作る。</p> <p>4 ワークシートに探検のイメージやルールなど必要事項を書き込む。</p> <p>5 探検の準備について教師の話を聞く。</p>	<p>何を持っていこうかな。</p> <p>どんな格好がいいかな。</p> <p>どんなことに気をつければよいかな。</p> <p>こんなものを見つけた。</p> <p>忘れないようにしなくては。</p> <p>早く行きたいな。</p> <p>暗れるといいな。</p>	<p>(3) 持参物・服装</p> <p>(4) 集団活動</p> <p>(5) 野外活動</p> <p>(6) 活動マップ</p> <p>(7) 天候</p> <p>(8) ワークシート</p>	<p>1 探検のイメージを具体的に,野外活動に必要な準備物について考えさせる。</p> <p>2 グループ編成の意図を伝え,協力できるようにする。</p> <p>3 野外での集団活動に必要なルールについての意識を高める。</p> <p>4 活動マップの親方について指導する。目的や計画,ルールなどについて記録するようにして,定着を図る。</p> <p>5 安全の確保を図るとともに意識を持たせる。</p>	教室		(マップで) R375 道路 畦 川・水路 ビオトープ 青空市場
<p>春のわくわく里山探検(4h)</p> <p>1 教室で持ち物を確認し校庭に集合する。</p> <p>2 人数を確認し出発する。列になって移動する。</p> <p>3 活動の範囲や時間などの事項について確認し,グループごとで探検し,〇〇見付けをする。</p> <p>4 地域の人のお話を聞き,探検の続きをする。</p> <p>5 人数を確認し学校へ移動する。</p> <p>6 ワークシートへ必要なことを書き込む。</p>	<p>いよいよ出発だ。</p> <p>どんなものが見つかかな。</p> <p>〇〇はいるかな。</p> <p>どこにいるのかな。</p> <p>〇〇見つけた。</p> <p>こういう名前なのか。</p> <p>〇〇さんは,よく知っているな。</p> <p>どんな名前だったかな。</p> <p>忘れないように書いておこう。</p>	<p>(3) 集団活動</p> <p>(5) ○○○○ムシ</p> <p>(6) ○○○ソウ</p> <p>(7) 図鑑の読み方 諸感覚 聞き方 / 問 方 野外活動 ワークシート</p>	<p>1,2 安全の確保を図るとともに意識を高める。</p> <p>3 活動「生き物探し・お名前発見」を仕組み,図鑑の活用を図るとともに,名前について関心を持たせる。</p> <p>4 地域の人のお話を通して自然のおもしろさに出会うようにする。「生きた図鑑」として地域の人と探検を楽しむようにする。諸感覚を通して活動を肯定的に評価する。</p> <p>5 安全の確保を図る。</p> <p>6 活動を振り返り,記録の習慣を育てる。</p>	教室 校庭 ルート ポイント ルート 校庭 教室	○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○ 土 砂 泥	R375 道路 畦 青空市場 山 川・水路 ビオトープ 生物

表3 学校へ提示した活動プログラム例（一部、各活動の内容も一部省略）

活動名	学習材	場所	季節	活動	時間	用具	ねらい	備考
1 生き物探し・お名前発見 I 動物			春夏 秋冬	一定の範囲の中でできるだけ多くの種類の生き物（動物）を見つけたら、名前を特定しないで見つけたことにはならない。カードに名前を書き込み、数や種類の多さ、珍しさを賞賛する。	各1		動物の名前を特定することで、よく観察してその特徴をつかむようにする。ゲーム化することによって、より多くの動物に触れるようにするとともに、生息場所についての関心を高める。	
2 生き物探し・お名前発見 II 植物			春夏 秋冬	一定の範囲の中でできるだけ多くの種類の生き物（植物）を見つけたら、名前を特定しないで見つけたことにはならない。カードに名前を書き込み、数や種類の多さ、珍しさを賞賛する。	各1		植物の名前を特定することで、よく観察してその特徴をつかむようにする。ゲーム化することによって、より多くの植物に触れるようにするとともに、生息場所についての関心を高める。	
3 ドングリ村の大冒険 I ドングリなる樹を探せ			春	ドングリなる樹を探し出し、位置情報やそれぞれの樹木名と特徴をマップングする。 通学路や自宅付近での調査に拡大する。	1		楽しみのあるドングリなる樹木を探しその名前や場所などを確認しマップに表すことを通して、樹木の植生に対する関心を高める。	
4 ドングリ村の大冒険 II ドングリに集まる虫たち			夏	樹液に集まる虫の種類や数を継続調査する。 調査の結果をグラフ化する。また、結果を持ち寄り集計したり違いを見たりする。	N		植物（樹木）と虫の関係と虫の生体に関心を持たせる。 調査結果をグラフ化して考察する力を育てる。	
5 ドングリ村の大冒険 III ドングリ採集・工作・科学			秋冬	ドングリを採集し、それぞれの種類と特徴を調べる。 ドングリを素材とした工作をして、遊ぶもの、飾るものを作る。 ドングリデンプンの抽出と簡単な化学実験を行う。	2		自然物を使って遊ぶものや飾るものを製作することを通して、身の回りの自然に対する関心を高めるとともに、自然物のいろいろな活用に気付かせる。	
6 野鳥をご招待 鳥はやってくるかな？			春夏 秋冬	地域にいる鳥の生態を調べ、餌場を作って観察する、どんなときにどんな鳥が来るかを記録する。	3		鳥の生態を調べたり観察をしたりすることを通して、観察・記録の技能を育てるとともに、地域の自然と生き物の関係についての関心を高める。	
7 大きな木 まわりは何 m？			春夏 秋冬	樹木の幹周りを比べ大きい（太い）木比べをする。必ず、木の名前や特徴、生息条件等を調べるようにする。	1		身近にあるさまざまな樹木についての関心を高めるとともに、樹皮や葉などの特徴に気付かせる。	
13 青空市場へようこそ			春夏 秋冬	青空市場に集まる野菜類とその産地、買い物客、市場の目的や経緯について調べ、結果をマップに表現したり発表したり話し合ったりする。	8		市場の集荷や販売の様子を調べたりまとめたりする活動を通して、久芳（後谷）が農産物を通してさまざまな地域と関連があることを理解させるとともに、他地域とのつながりに対する関心を高める。	

合った。ここで、連携についての基本的な合意を得た。

② 単元プラン例と活動プログラム例の提示 [3月26日(水)]

本研究グループから学校の全職員に対して、連携の趣旨説明と単元プラン例(表2)及び活動プログラム例(表3)の提示を行い、質疑応答を行った。新年度になって学校体制が整った後、プランを具体化し推進していくこととなった。

③ 単元開発についての打ち合せ [5月28日(水)]

学校から連携学年(第1・2学年)及び教科(生活科)についての提案を受けて、単元構成の基本方針を話し合うとともに、学習材の選定のための調査を実施した。このとき、今回、学習材とする「水辺」は、学習者が1・2年生であることから、学校により近い後谷地区外の水辺とすることになった。この事例では、ここがエコミュージアムのサテライトと見なされる。

この後、直ちに単元構成案の具体化、家庭との連携について作業に入った。なお、この活動では、水辺の場所と時間の都合で大学関係者以外の地域の人材の直接的な参加が得られないため、保護者が地域の人材としての役割も担うこととした。

④ 主活動「夏だ! わくわく久芳水遊び隊」についての打ち合せ [7月2日(水)]

子どもの実態を理解するために、本研究グループが第1・2学年生活科の授業参観を行った。引き続き、1週間後の主活動日の授業過程、指導体制、準備物等について細かい打ち合わせを行った。

⑤ 主活動の実施 [7月9日(水)]

1年生19名、2年生16名、教諭3名、保護者35名、大学関係者12名(教官4名、大学院生・学生8名)が参加して、主活動を実施した。

その後、子どもの学習状況と学習展開について随時連携を取った。

⑥ 「秋フェスティバル」への参加 [11月4日(火)]

1・2年生が、地域の人・社会・自然とかわる生活科「秋フェスティバル」を実施した。本研究グループの構成員が、6年生や保護者ととともに、この活動に参加した。

3.2 「夏だ! わくわく久芳水遊び隊」の概要

この活動は、学校から徒歩15分ほどの場所にある小川の水辺で、手作りおもちゃで遊んだり動

植物とかかわったりする体験活動である。活動は、第1学年生活科単元「あそびにあこうよ」、第2学年生活科単元「町たんけん」の一部であり、移動時間等を含め3時間で構成されている。両学年において別個に展開されている学習が、この活動において交わり、その後再び各学年における学習に発展する形になっている。

活動は、1年生、2年生混合の4グループが単位となって行われた。各グループには、保護者、大学院生・学生が加わり、一緒に活動したり子どもの活動を支援したり安全確保にあたりした。

3.3 概念地図法にみる子どもの変容

表4は、活動前と活動後の「川」をキーワードにした概念地図に記述された項目数の変化を示したものである。表5は、平均値に近い項目数となっている子どもの記述例である。

概念地図への記述の状況が一樣でなく、正確なデータではないが、全体的には子どもたちのイメージする項目が増えていると言えよう。特に1年生では、大きな変化が見られる。個別の変容をみると、1年生で項目数が増加した子どもは、19名中18名、2年生では16名中10名であった。子どもたちから大学へ寄せられた手紙やワークシートの状況及び担任教諭の観察によれば、本活動は1

表4 概念地図における項目数の変化

	活動前	活動後	増減
1年生(一人あたり)	2.5	9.8	+7.3
2年生(一人あたり)	12.7	16.1	+3.4

表5 概念地図への記述例

	活動前	活動後
1年生 A児	魚 石 カメ	トンボ ダンゴムシ アメンボ ヤゴ カエル タニシ 幼虫 トカゲ ドジョウ 魚
2年生 B児	橋 苔 石 自然 植物 魚 卵 水 虫 どぶ	カエル アメンボ 水 どり 金 植物 魚 卵 タニシ ミズカマキリ 石 きらきら 虫 ヤゴ メダカ ムツゴロウ

年生、2年生ともに、その後の学習展開や日常生活に大きな影響を与えている。

4 エコミュージアムの発想に基づく連携

4.1 「学校・家庭・地域の連携」の枠組み

「学校・家庭・地域の連携」をどのようにイメージすればよいだろうか。ここでは、学校、家庭、地域のほかに、「大学」を加えて、図1のように示してみた。前述した事例における広島大学のように、地域における機関や企業も、連携に一定の役割を受け持つことができるからである。図1における楕円内の「地域」は、地方公共団体や地域の共同体、ボランティアサークルやスポーツ同好会など団体・組織としての地域である。この「地域」を含め、学校も家庭も大学や企業も、「空間としての地域」に存在する。エコミュージアムの発想に基づくならば、図1の全体を「空間としての地域」と考えるとともに、さまざまな学習材が存在する学び場として捉えることができよう。

表6(次頁)は、図1におけるそれぞれの矢印の持つ内容を、先の事例に基づいて例示したものである。大学(本研究グループ)には、学校の教師や子どもたちから、指導法や学習材の内容などについて高い期待が寄せられた。一方、大学にとっては、学校・家庭・地域の実態を知り、さまざまな取り組みに参画することを通して貴重な事例を得ることができた。取り組みにかかわったそれぞれが、発信したり受信したり、要請したりされたりという連携の具体的な内容を持っている。

連携にあたっては、まずこのような連携のイメージとなる枠組みが必要である。そして、連携の

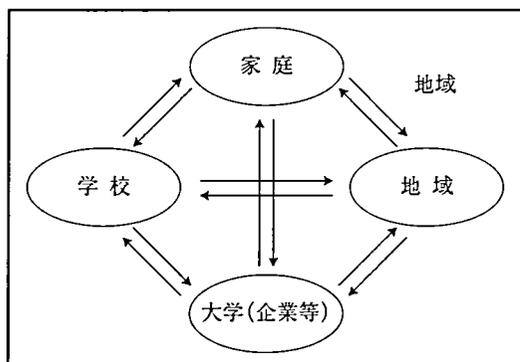


図1 学校・家庭・地域・大学(企業等)の連携のイメージ

テーマや課題など、その意図に即して、連携の内容を想定することが必要である。このとき、必ずしもすべての枠にもれなく内容が埋まるとは限らない。しかし、連携にあたっては、予めこのような連携の具体的な内容を想定しておくことが必要である。

4.2 学校・家庭・地域のコーディネート機能

先の事例から、学校や家庭や地域は、単純に一对一で対応して連携をするわけではないことが明らかになった。例えば、大学は地域の体験活動に参画したりプログラム等を提案したりすることによって、地域と学校を結び付けた。また、学校は、単元構成にあたって、家庭と大学の連携のきっかけをつくった。このように、あるところが、他の二つを結び付けていく機能が見られたのである。このような、言わばコーディネートの機能も必要であろう。表7は、それを想定する際の枠組みを示すものである。

4.3 エコミュージアムとマップづくり

エコミュージアムは、その発想そのものが「学校・家庭・地域の連携」をサポートするものである。さらに、エコミュージアムの活動は、「学

表7 連携におけるコーディネートの機能の枠組み

主体	コーディネートの対象	機能
学 校	家庭⇔地域	
	家庭⇔大学(企業等)	
	地域⇔大学(企業等)	
家 庭	学校⇔地域	
	学校⇔大学(企業等)	
	地域⇔大学(企業等)	
地 域	学校⇔家庭	
	学校⇔大学(企業等)	
	家庭⇔大学(企業等)	
大学(企業等)	学校⇔家庭	
	学校⇔地域	
	家庭⇔地域	

表6 生活科学習の事例及び関連する取り組みにおける学校・家庭・地域・大学(企業等)の主な連携内容例

連携主体	連携先	内 容 例
学 校	家庭	学校における子どもの姿の発信 単元や本時授業の目標・内容・方法の発信 学習や学校行事の案内 学習や学校行事への参加・協力要請 家庭訪問
		家庭における子どもの実態の把握 授業等に対する質問・意見の受信
	地域	学校における子どもの姿の発信 単元や本時授業の目標・内容・方法の発信 学習や学校行事の案内 学習や学校行事への参加・協力要請 地域の行事等への参加・協力
		地域における子どもの実態の把握 授業等に対する質問・意見の受信 地域の行事等の案内の受信
	大学 (企業等)	学校における子どもの姿の発信 単元や本時授業の目標・内容・方法の発信 学習や学校行事の案内 学習や学校行事への参加・協力要請 大学訪問
		子どもの発達段階や一般的実態の把握 授業等に対する質問・意見の受信 単元プラン・活動プログラム等の受信 指導法・実践事例等の情報収集
家 庭	学校	家庭における子どもの姿の発信 授業等に対する質問・意見の発信 学習や学校行事への参加・協力
		学校における子どもの姿の把握 単元や本時授業の目標・内容・方法の受信 学習や学校行事の案内の受信 家庭訪問の受入
	地域	家庭における子どもの姿の発信 体験塾(土曜日)など地域と大学がつくる体験学習への子どもの参加 地域の行事等への参加・協力
		地域における子どもの姿の把握 地域の行事等の案内の受信
	大学 (企業等)	家庭における子どもの姿の発信 生活科学習への共同参画 共同参画した生活科学習に対するコメントの発信
		子どもの発達段階や一般的実態の受信 共同参画した生活科学習に対するコメントの受信
地 域	学校	地域における子どもの実態の発信 授業等に対する質問・意見の発信 地域の行事等の案内 地域の行事等への参加・協力要請 学習や学校行事への参加・協力
		学校における子どもの姿の把握 単元や本時授業の目標・内容・方法の受信 学習や学校行事等の案内の受信
	家庭	地域における子どもの実態の発信 地域の行事等の案内 地域の行事等への参加・協力要請
		家庭における子どもの姿の把握 体験塾(土曜日)など地域と大学がつくる体験学習への子どもの受入
	大学 (企業等)	地域における子どもの実態の発信 地域の行事等の案内 地域の行事等への参加・協力要請 体験塾(土曜日)など地域と大学がつくる体験学習の構成 地域貢献課題研究への応募
		子どもの発達段階や一般的実態の受信 エコミュージアムづくりの提案の受信
大 学 (企業等)	学校	子どもの発達段階や一般的実態の発信 単元プラン・活動プログラム等の提案 指導法・実践事例等の発信 授業等に対する質問・意見の発信 学習や学校行事等への参加・協力
		学校における子どもの姿の受信 単元や本時授業の目標・内容・方法の受信 学習や学校行事の案内の受信 大学訪問の受入
	家庭	子どもの発達段階や一般的実態の発信 共同参画した生活科学習に対するコメントの発信 生活科授業への共同参画
		家庭における子どもの姿の受信 共同参画した生活科学習に対するコメントの受信
	地域	子どもの発達段階や一般的実態の発信 地域の行事等への参加・協力 体験塾(土曜日)など地域と大学がつくる体験学習の構成 エコミュージアムづくりの提案
		地域における子どもの実態の把握 地域の行事等の案内の受信 地域貢献課題研究の受入

校・家庭・地域の連携」を具現化する。その際、地域の資源を再評価、再価値化した結果を、マップとして、記録、表現することができる。

マップは、生活科の学習においても重要な役目を果たしてきた。いわゆる「生活科マップ」は、地域にあるさまざまな素材を洗い出し、学習材としての可能性の検討を経てマップ上に掲載していくことによって、作成されたものである。この作成のプロセスは、エコミュージアムの活動のプロセスと類似している。エコミュージアムの発想をより活かすならば、生活科マップが単に地域にある学習材を載せたものではなく、掲載された学習材が動的に活用され、マップ自体も絶えず発展していくような形にすることが必要であろう^⑩。また、いわゆる生活科暦や人材マップも併用されることが望ましい^⑪。

「学校・家庭・地域の連携」は、子どもの教育のよりよい全体像の創造に極めて重要であるが、実際に連携するに際しては何らかの具体がなければ機能しにくい。エコミュージアムの活動やマップづくりなどは、極めて有効な具体となるであろう。

5 おわりに

久芳小学校では、本事例だけでなく「総合的な学習の時間」の取り組みなどにおいても家庭や地域を巻き込んだ独創的な活動が構成されており、「学校・家庭・地域の連携」は良好に機能している^⑫。これには、一定の条件がある。中でも重要なのは、お互いの信頼関係という素地があることであろう。ただ、これは、単なる素地ではなく、信頼関係があるから連携が機能し、連携が機能するからより信頼関係が強くなるという関係にある。一般的には、このようなサイクルを動かすために、その学校や地域に適したどのような具体を設定するかが課題となろう。

本研究で示した枠組みや方法は、一つの事例に基づく基礎的なものである。いろいろな事例に援用しながら、より有効で適切なものに改善していきたい。

謝辞

実践や資料提供など本研究にご協力くださいました福富町立久芳小学校の教職員、保護者、児童の皆様、学区域の住民の皆様にご心より感謝申し上げます。

げます。

注

- ① 福田珠己，座談会－観光を歩く（荒山正彦・関戸明子・福田珠己・安井真奈美による座談会）『地理45-11』2000，p.22。
- ② 例えば，新井重三『実践エコミュージアム入門－21世紀のまちおこし』牧野出版，1995。新井重三編『エコミュージアム－理念と活動』牧野出版，1997。大原一興『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会，1999。小松光一編『エコミュージアム－21世紀の地域おこし』家の光協会，1999。
- ③ 有馬毅一郎「学校と家庭・地域の連携」中野重人・谷川彰英・無藤隆編『生活科事典』東京書籍，1996，pp.126-127。
- ④ 総合的な学習として，例えば，玉井康之『地域に学ぶ「総合的な学習」』東洋館出版社，2000。道徳教育として，例えば，『道徳教育 No.526』明治図書出版，2002，における特集。
- ⑤ 文部省『小学校学習指導要領解説 生活編』日本文教出版，1999，p.24，参照。
- ⑥ 例えば，有馬毅一郎，前掲論文。
- ⑦ 例えば，椎名仁「地域社会との連携」永岡順・天笠茂編『生活科と学校経営』東洋館出版社，1993，pp.166-179。藤池安代「地域の施設と人材の活用」村川雅弘・藤池安代編『生活科教育実践－生活科の本質とその具体化を求めて－』ナカニシヤ出版，1994，pp.235-237。
- ⑧ 藤池安代「生活科の年間指導計画」村川雅弘・藤池安代編，上掲書，pp.37-58。
- ⑨ 例えば，有馬毅一郎，前掲論文。
- ⑩ 生活科マップについては，例えば，森透「生活科マップ」中野重人・谷川彰英・無藤隆編，前掲書，pp.318-319。
- ⑪ 生活科暦については，例えば，森透「生活科暦」中野重人・谷川彰英・無藤隆編，上掲書，pp.316-317。人材マップについては，例えば，田中實「人材マップ」中野重人・谷川彰英・無藤隆編，上掲書，pp.126-127。
- ⑫ 活動の様子については，テレビ番組「お好みワイドひろしま 5時台」（NHK広島放送局制作，コメンテーター・朝倉淳，2003/10/22放送）でも紹介。